

博物館だより

No.34

平成21年2月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

ミニ企画展 ダムに沈むムラ・伊良原① 屋根裏からのメッセージ

～古いお札が語る山人の信仰世界～

現在、当館では、ミニ企画展「屋根裏からのメッセージ」古いお札が語る山人の信仰世界」を開催しています。

今回の企画展では、県営伊良原ダムの建設工事が進む町内伊良原地区にスポットを当て、独特の山間文化に彩られた伊良原の魅力や、様々な切り口で見つめ直してみたいと考え企画したものです。

第1回目となる今回は、平成19年にダム工事にもなつて解体された民家から見つかった江戸時代の「お札」を展示しています。数百点の「お札」から、村人たちの「祈りの心」を知っていただきたいと思います。

■開催場所

博物館第2展示室



▲蔵持山の「お札」

■観覧料
常設展の観覧料でご覧いただけます。

■会期
平成21年3月1日(日)まで

2月期歴史講座のご案内

【漢詩文講座】

2月7日(土) 9時30分～

【古文書講座】

2月14日(土) 10時00分～

【みやこ学講座】

2月22日(日) 13時30分～

*下段の文化講演会に合流

【金曜古文書講座】

2月27日(金) 10時00分～

【古典かな講座】

2月28日(土) 9時30分～

臨時休館のお知らせ

館内整理および燻蒸作業のため3月2日(月)～3月6日(金)の間、博物館は臨時休館致します。

臨時休館中、博物館および文化財業務に関するお問い合わせは、以下へお問い合わせください。

教育委員会 生涯学習課

☎ 33-3114

文化講演会のお知らせ

日時 平成21年2月22日(日)

午後1時30分～

場所 当館研修室

講師 大阪府立狭山池博物館

館長 工楽善通先生

演題 「勝山池田遺跡と狭山池」

(仮称)

※どなたでも聴講できます。(無料)

博物館友の会

会員募集!

みやこ町歴史民俗博物館友の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに講演会やバスハイク、史跡巡りなどさまざまな行事を行っています。意欲のある方であればどなたでもお気軽に参加いただけます。

ぜひご入会ください。

♪入会の方法

博物館の窓口で会費を納めてください。博物館の窓口まで来るのが難しい方は、一報を!

♪年会費

個人会員 3000円

家族会員 1名2000円

♪備考

- ・年度途中からの入会も可能。
- ・町外の方でも入会できます。

♪お問い合わせ先

みやこ町歴史民俗博物館内
友の会事務局

☎ 0930-33-4666

《古文書解読コーナー》

① さき

② 〈ヒント〉 空模様

③ 片集

④ 〈ヒント〉 過不足を計算しなす

⑤ 室女

⑥ 〈ヒント〉 いちばん先

⑦ 舟

⑧ 〈ヒント〉 ハンコ

⑨ 舟

⑩ 〈ヒント〉 人にみせる

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 印刷
- ② 墨
- ③ 墨
- ④ 墨
- ⑤ 墨
- ⑥ 墨
- ⑦ 墨
- ⑧ 墨
- ⑨ 墨
- ⑩ 墨

みやこの歴史発見伝 23

「おむくの墓」と子守唄

—漂泊の職人・木地師をめぐる哀話とその周辺—



▲ひっそりとたたずむ「おむくの墓」

おむくの墓と伝説

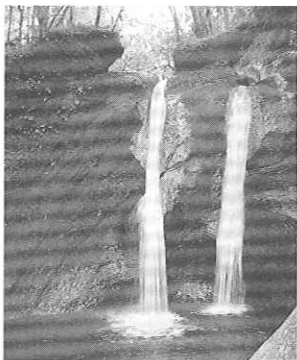
夏はキャンプの人たちでにぎわう蛇湖の滝キャンプ場（みやこ町犀川帆柱）を少し下った国道脇の斜面に「おむくの墓」とよばれる小さいながらも立派なたたずまいの古墓があるのをご存知ですか？

このお墓は、今から約250年ほど前におきた悲劇のヒロイン「おむく」と呼ばれる娘の供養のために造られたもので、地元犀川帆柱地区では今なおさまざまな形で供養や語り継ぎが行われていますが、その「悲劇」とは次のようなものだといえられています。

その昔「木地師」と呼ばれる、材料となる木片から「ろくろ」を用いて椀や盆を作り出す職人がいて、彼らは良材を求め

て諸国を渡り歩いてきた。享保飢饉後、帆柱の地にやってきて操業を始めた一団に小椋左次右衛門の一家があったが、当主左次右衛門は妻をなくして一人娘おむくと二人暮らしであった。

ある日、左次右衛門は「近頃は割当の山の木も切り尽くした上に安い瀬戸物が出回って商売上がったりだ。食いつなぎに下財（釜山産）に出かけるから娘を頼む」と知り合いに娘を預け、「かんだ」の金山へと出稼ぎに向かった。一人娘のおむくは父が恋しくてならないが、仕送りの来ることをみは無事の証に一年二年と日を送ったものの、三年目のある日、金山から手紙が来たのを見てみると「左次右衛門が争



▲おむく終焉の地とされる蛇湖の滝

故に死んだので引き取りに来るように」との内容。たった一人の肉親を失ったおむくの落胆は覆うべくもなく、ついには蛇湖の滝に身を投げ帰らぬ人となった。これを哀れんだ村人はおむくの供養に墓を立て、ねんごろに弔った。

時に宝暦十年（二七六〇）十一月のことで、この悲劇は子守唄によつて永く村人たちの間で語り継がれ現在に至っている。

といったところがその内容です。哀調を帯びた子守唄は昭和40年代頃まで歌い継がれていたようですが、現在は歌い方がわかる方はいなくなり、歌詞のみが伝えられています。ただ最近、ほぼ同じ歌詞を伝える大分県中津市の子守唄が譜面とともに記録されていることがわかり、これをもとに犀川少年少女合唱団の皆さんが約40年ぶりの復元を遂げられました。



▲おむくの墓に詣でる合唱団の皆さん（平成16年）

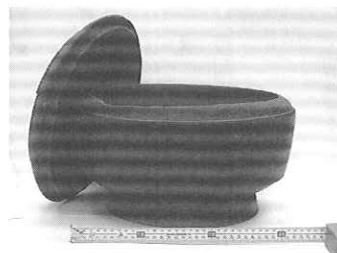
劇を分析してみると…

静かな山村では相当ショツキングな出来事だったのでしよう、世紀を越えて語り伝えられる出来事は飢饉や戦乱など多くの犠牲を伴うものが中心のようですが、心中やおむく事件のような人々の心を打つ出来事は、たとえ犠牲者の数は少なくとも同様に語り継がれるもののようにです。

ところでこの哀話、厳然たる史実かというと一部に疑問も残るのですが、ことの実否は別にしてその背景や関連の事象を追いかけてみると実に様々なことがわかる貴重な「文化の情報源」であることがわかります。

まずヒロインおむくたちの生業である木地師のことですが、木地師は「轆轤師」「木地屋」とも呼ばれて独特の職相伝承や組織を持ち、「飛び（あたり）」と呼ばれる移動を繰り返す特殊な職人集団であったことが知られています。

木地師業は文徳天皇の第一皇子・惟喬親王（844-897）が発明し、その技は縁の者たちに伝えられるとともに、親王は木地師保護のため「諸国の山林、七合目以上の伐採御免」の免状を与えたとされています。その後木地師たちは親王の領地・近江国小椋荘



▲帆柱の旧家に残される木地師作の「飯びつ」

（滋賀県）に役所（公文所）を設けて職人の免許制と組織化を進め、江戸時代には全国組織となつてほぼ公認の存在となりました。彼らは根源地とされる「小椋」荘の地名を名字とし、公文所発行の鑑札と免状を持つて各地で操業、その姿は明治半ば頃まで見られたとのことでした。

この業態ゆえに彼らは定住生業者≠農業民の対局の存在と捉えられ、漂泊生業者≠非農業民の代表的存在として注目を集め、近年は彼らこそが「森の民」≠縄文人の末裔では？といったユニークな研究も現れています。

ちなみに「おむく」の名は彼らの姓「小椋」を読み誤ったもので、実際には「おふぢ」が本名であることが公文所の名簿から判明しています。また、同様の子守唄は九州各地や遠く和歌山にも分布することがわかってきており、おむく哀話の謎？は深まるばかりのようです。（木村達美）